「やまなし」という物語は、岩手県で生まれた宮沢賢治さんが書いた物語です。5月と12月の谷川の底の様子をカニの視点で物語が展開されます。知らないことがたくさんある谷底で、どんどん自然のものを見聞きしていく、カニたちの描写が描かれています。どこか神秘を感じる作品です。

「やまなし」の魅力は、最後の部分です。最初は、自然界の厳しさを教えられるカニたちですが、最後に嬉しい出来事が待っています。それはまるで、生きる嬉しさをカニたちに教えてもらっているような気分になります。様々な不思議な用語が出てきて最初は困惑しますが、何回か読んでいくにつれ、その用語がいい味を出していることに気づきます。

やる気が出ない人も「やまなし」を読むと谷底でも精一杯生きているカニたちの様子を見てなんだかやる気が出てくるかもしれませんね。

「やまなし」というこの物語は読み取るのが難しい本ですが、何度も読むとかなり面白い本になっています。登場生物が長さの割に少なく、カワセミ1羽とカニ３匹、やまなし1房、謎の生物となっており、中心にでてくる登場生物がカニの3匹だけで構成されています。

「やまなし」で欠かせないのが謎の生物クラムボンとカニのお父さんです。「クラムボンが殺されたよ」と言ったあとに、入れ違いで出たのがカニのお父さんで、カニのお父さんはかなり落ち着いていてものしりで、二匹のカニの子供を支えてくれる、終盤でも出てくる重要人物です。

国語が好きな人に読んでもらいたい本で全年齢読めるような作品ですが、特に小中学生の人などにオススメです。

「やまなし」は、宮沢賢治の空想の世界で描かれた、川底に住むカニの兄弟の物語です。カニの兄弟が住む川底には、突然魚を襲ってくる生き物や、宮沢賢治がつくった謎の生物が出てきて、ハラハラ・ドキドキする一方、五月と十二月の構成から、カニの兄弟たちの成長も見受けられます。

この物語で欠かせないのは「やまなし」です。この物語では、魚が襲われたり、突然大きなものが川底に落ちてきたりして、カニたちがおびえたり、恐怖を感じたりする場面が多々ありますが、最後には「やまなし」の登場によってカニたちに幸せを与えます。これは、「動物も植物も互いに心が通い合うような世界」という宮沢賢治の理想が表現されているのではないかと思いました。

一度読むだけでは、わかりにくいことも多いですが、何度か読み返したり、五月と十二月を読み比べてみると納得することや分かることが増えて面白いです。物語が好きな人や、物語を深く読み取ることが好きな人におすすめです。

「やまなし」とは宮沢賢治の幻灯の中で、二匹の子供のカニとお父さんカニに起こった出来事によって、恐怖や幸せを感じさせてくれます。常に一緒にいる兄弟のカニたちがメインで物語が進み、家族の仲の良さなどが伝わってきます。この物語は絵本にもなっていますが、対象年齢が小学生から中学生となっています。

はじめの兄弟のカニ達が喋っている所や後半のカニの兄弟が成長したときの会話が特に良いと思いました。はじめの方の会話では、疑問を投げかけながら仲良く会話をしていましたが、後半ではカニの兄弟が泡の大きさを比べているシーンがあります。その時に兄弟で遊ぶ仲の良さが伝わってきて、心が和みます。

読んで見ると宮沢賢治さんの考え方などが少しわからないという方もいるかもしれませんが、何回か宮沢賢治さんの物語を読んで見ると理解できると思うのでぜひ読んでみてください。

「やまなし」とは、作者である宮沢賢治が作った二枚の青い幻灯のお話。

「やまなし」の魅力といえばカニの家族だ。とくに欠かせないのがカニの兄弟。そこで、僕がおすすめするのは、兄弟の争いのところだ。兄弟のカニが泡の大きさで勝負をするが、弟が負けてしまう。だがしかし、その後きちんと仲直りをするのだ。

家族で兄弟がいるひとは、1度は兄弟喧嘩をしたことがあるだろう。そんな兄弟喧嘩をしてもカニの兄弟はすぐ仲直りをした。だから兄弟喧嘩するのはいいがすぐ仲直りをしようと学べる話だと僕は思う。

やまなしのストーリーは、宮沢賢治の理想の世界を川の中の物語にした話だ。登場人物(動物)はカニの子供の兄弟とカニのお父さんとカワセミと魚、クラムボンである。

自分がやまなしを読んだとき好きになったところは、5月にクラムボンが殺されたり、カワセミに魚たちが食べられたりすることだ。その後、子供のカニの兄弟たちは怯えて声も出ずに居ずくまってしまったのだ。だけど、カニの兄弟たちが12月になって成長し、お兄さんのカニと弟のカニで空気の泡の大きさを競っているとき、「そのとき、ドブン」と、黒い大きな丸いものが落ちてきたのだ。その正体はやまなしで、やまなしからはいい匂いがした。その匂いで嬉しくなっているところが好きなところだ。

悩んでいる人などに読んでほしいと思った。理由は、小さなことでも嬉しいことを、カニの兄弟たちのように喜んでいると、悩みなどが消えるかもしれないと思ったからだ。

　これは、宮沢賢治の想像した世界に住む、かにの親子のお話だ。かにの親子が小さな川の底に住み、自然の恐怖に向き合いながら生活していた。しかし、そんな暮らしの中で幸せをあたえた存在「やまなし」。このお話では、「やまなし」とかにの親子の心情や行動が、読み手の疑問を解くための重要なキーパーソンとなる。「やまなし」に欠かせないのは、かにの子供たちに恐怖を与えたかわせみだ。ここであえて自然の恐怖を読み手に伝えることで、かにの親子が「やまなし」を見つけたときの幸せが、読み手の心に深く刻まれる。厳しい生活の中で、幸せを見つけたかにの親子。その姿はまるで、「苦しい農作業の中に、楽しさを見つける。工夫することに、喜びを見つける。そうして、未来に希望を持つ。」という、宮沢賢治の理想と重なっているようにも感じた。「やまなし」という物語を読んで、苦しいことがあっても、いつか幸せなことが起きる、未来に希望を持つ、という大切で、広い心を学ぶことが出来た。未来に希望を持つことの大切さを、かにたちが教えてくれたような気がした。

「やまなし」という物語は、岩手県で生まれた宮沢賢治さんが書いた物語です。5月と12月の谷川の底の様子をカニの視点で物語が展開されます。知らないことがたくさんある谷底で、どんどん自然のものを見聞きしていく、カニたちの描写が描かれています。どこか神秘を感じる作品です。

「やまなし」の魅力は、最後の部分です。最初は、自然界の厳しさを教えられるカニたちですが、最後に嬉しい出来事が待っています。それはまるで、生きる嬉しさをカニたちに教えてもらっているような気分になります。様々な不思議な用語が出てきて最初は困惑しますが、何回か読んでいくにつれ、その用語がいい味を出していることに気づきます。

やる気が出ない人も「やまなし」を読むと谷底でも精一杯生きているカニたちの様子を見てなんだかやる気が出てくるかもしれませんね。

　いつも暇な時間に「やまなし」を見ると、そこには作者「宮沢賢治」の理想の世界が広がっている。苦労の中に希望を見つけるという賢治の最も理想的な世界を写している作品だ。この本は、読めば読むほどに作品の意図がわかり、もっと知りたいという欲が出てしまう。
　「やまなし」は主人公のかにの兄弟とそのお父さんで話が進んでいく。そのカニの兄弟は宮沢賢治の生き方を丸写ししたような生き方をしていて、賢治の理想の世界にカニの兄弟は住んでいて、そのことに気づきもう一度読むと、物語の進み方、カニ兄弟やお父さんの言動、途中で出てくる驚異的な存在。最後に物語を一気に明るくするやまなしが出ていることに気づき、驚愕で声も出なくなるほどに「すごい」という気持ちになるのだ。
　この話は宮沢賢治の理想の世界を体現したお話である。もし少しでも暇な時間があれば読むことをおすすめする。なぜなら、物語をもっと知りたいと思う好奇心が現れ、暇な時間は一瞬で終わるからである。

　ページを開いたら、作者の幻灯が始まり、蟹が出てくる。水の中の世界を舞台とした、蟹の家族の物語だ。特に家族の弟蟹が中心として話が進んでいく。弟蟹が恐怖を感じ、逆に幸せも感じることのできる作品である。

　この物語に欠かせない人物、又は果物がある。それは弟蟹に恐怖を与えるカワセミ。そして、一番弟蟹に幸せを与えるのが題名のやまなしという果物である。弟蟹は、大きな恐怖をカワセミに感じさせられた。だが、年月が経ち、天井から黒い鉄砲玉のようなものが降ってきたと思ったが、それはやまなしだった。やまなしは、蟹にとって酒にもなるし、食べ物にもなる、まさに蟹にとって幸せを感じるものとして扱われていたのだ。それも読んでいると、自分も幸せと感じるのだ。

　やまなしを読むと、自然の恐怖よりも周りに幸せを与える生き方が学べると思う。人によって違うが、蟹にとってはやまなしで、自分にとっても幸せを感じられるものがあると考えたら、少し蟹のように気が楽になるかもしれない。

　皆さんは宮沢賢治作の「やまなし」を知っているだろうか。川底でカニたちにいろいろな出来事が起こる。家族構成は弟と兄と父で、時がたつにつれてカニの成長も見られる。
　「やまなし」の好きなところは何と言っても兄と弟が泡の大きさを勝負しているところだ。泡の大きさを勝負しているのが仲良しでほっこりする。自分も幼いとき兄と物の大きさで勝負していたけど、川底のカニたちも同じことをしていて、カニが幼い頃の自分に見えてくる。泡の勝負をしていたカニたちも、物語の終盤にはすっかりそんなことはしない。自分も小さいころは物の大きさ勝負をしていたけど、今ではそんなことはしない。カニも成長しているし、自分も成長している。自分の成長を感じたい人にオススメする。

６年生の２学期、国語の教科書に「やまなし」がある。川を舞台にした、ごくごく普通なカニの親子たちを中心に、なんてことないやまなしをコミカルに描いた作品だ。カニの親子がダラダラしながらハラハラドキドキして面白いです。

「やまなし」の魅力に欠かせないキャラクターは、カニのお父さんだ。カニのお父さんはカニの兄弟が何かを聞いても知っていて、すぐ答えてくれるそんな人だ。カニのお父さんは、なんでも知ってる人でいい人だ。だからそんなカニのお父さんを見ていると優しいと思うのだ。

嫌なことがあって、落ち込んでもこの「やまなし」を読めば、「明日も頑張ろう」という気持ちになる。

川の底に住んでいるカニの兄弟を、五月と十二月のカニの兄弟目線で書かれている物語です。カニの兄弟の五月と十二月での成長の変化が見ていて面白いなと感じました。

「やまなし」の物語で特に欠かせない存在は、やまなしです。やまなしはこの物語の題名にもなっていて、物語が進んでいく上で欠かせないものです。五月では暗い感情だったカニの兄弟が、やまなしが流れてきてから幸せという明るい感情に変わっていました。やまなしがカニの兄弟を幸せにする場面を読むと、自分も周りの人に幸せを与えられるようになりたいなと思えてきます。

「やまなし」は、一回読んだだけではよくわからない作品です。何回も読んだり、自分で考えたりすると、「やまなし」という物語がより面白く読めると思います。

「やまなし」は、宮沢賢治さんが空想で作った物語で、５月と１２月の二部構成で、書かれています。カニの兄弟は負けず嫌いで怖がりです。そのようなカニたちは５月と１２月で心情が変化します。

「やまなし」の魅力はカニの兄弟が喧嘩しているところです。負けず嫌いの弟と兄が泡の対決で喧嘩していましたが、お父さんが来て決着がつきました。それはまるで僕と弟のようでカニの兄弟たちの気持ちがわかりました。

宮沢賢治さんの本は初めて読んでみると意味が少しわからないことが多いけど、何度も読むと意味がわかってきます。ぜひ難しい本が好きな人は読んでみてください。

　この物語は青い谷底から始まるカニたちの物語です。兄弟のカニを中心に、襲われたり、やまなしの流れについて行ったりする、色々と謎が深い作品です。「やまなし」の魅力に欠かせないのがカニのお父さんとカニの兄弟です。カニの兄弟たちは大きく泡を吹けるか勝負したりして可愛いです。お父さんのカニは、カニの兄弟の存在感を引き立てていて「やまなし」の魅力を引き立てていると思います。難しい本を読むのが好きな人にオススメします。

　この「やまなし」という本は、宮沢賢治さんの作品です。宮沢賢治さんといえば有名な作品で「雨ニモマケズ」という詩があります。この「雨ニモマケズ」で、宮沢賢治さんを知っている人も多いのではないのでしょうか。小学5年生のときに自分も「雨ニモマケズ」を知りました。そんな宮沢賢治さんの作品の「やまなし」はとても面白い内容でした。
　この「やまなし」という物語では、かにの兄弟が主人公となって出てきます。この作品の好きなところは、かにの兄弟が競うシーンです。特にこの物語には関係のない会話なのですが、いろいろな感情が混ざっていて面白く、そのようなシーンが好きでした。
　この「やまなし」を作った宮沢賢治さんの生き方などがわかる、「イーハトーヴの夢」という作品も読んでみたら、宮沢賢治さんがとてもすごい人というのがわかりました。この「イーハトーヴの夢」を読んだ後に、また「やまなし」を読んでみると、「イーハトーヴの夢」を見る前とは、見る視点が変わって面白いので、この「イーハトーヴの夢」という作品も読んだ方がいいと思います。「やまなし」は読んでいくごとに新たな発見がある作品ですので、「やまなし」を読んでみてください。

　周りに幸せがあると気づかせてくれる作品なので、落ち込んでいるときや、幸せを感じないときに、読んでみてはいかがでしょうか。

賢治が作った空想の世界の川に住むカニの兄弟のお話。２つの幻燈に分かれていて比べて読むと様々なことがわかる。カニの兄弟にも注目して読むと面白い。

カニの兄弟が泡を吐いて会話してるところがほのぼのしていて好き。他にも「クラムボンは笑ったよ」「クラムボンはかぷかぷ笑ったよ」というところの「かぷかぷ」というところが賢治の独特なオノマトペで面白いと思った。

賢治は感性が少し変わっていてむずかしくて読み取りづらいから、簡単な本が好きな人には不向きかも知れないけど、難しい本が好きな人や、物語からなにか読み取るのが好きな人にはおすすめ。

「やまなし」は宮沢賢治が考えたお話です。川の中に住んでいるカニのお父さん、カニのお兄ちゃん、カニの弟が登場する作品です。人間にとってはかわせみが川に口をただ入れているだけの出来事だけど、カニたちにとっては恐怖なのだという、他の生物の生き方がよくわかる話です。

「やまなし」は、題名のとおりやまなしが登場するお話です。やまなしが木から落っこちてカニたちがかわせみと勘違いをして恐怖になるが、カニたちは何度も恐怖を体験することで成長します。「やまなし」は、色々考えさせられて宮沢賢治の独特な世界観がわかりやすく表現されていました。

誰かといっしょに見れば、宮沢賢治の独特な世界観を共有することができます。

小さな谷川の底を写した、二枚の青い幻灯がある。小さな谷川の底を舞台にした、カ二の親子を中心に、５月と12月の出来事を描いた作品だ。カ二の親子に何が起こるか分からず、悲しくなったり、ドキドキしたりする。

「やまなし」の魅力に欠かせないのはカ二の親子の中でもカ二の兄弟だ。お話の中で主人公といえば人間が多いけどこのお話の主人公はカ二の兄弟で、他のお話とは違うカ二の兄弟が体感していることやカ二の兄弟におこる悲しいことや楽しみなことなどの心情が読み取れるのだ。そんなカ二の兄弟を見ていると、なんだか温かい気持ちになる。

たとえば嫌なことや悲しいことがあったら、「やまなし」を読んでほしい。「やまなし」を読めば、カ二の親子に「嫌なことや悲しいことがあっても、自分で楽しいことや嬉しいことを見つければ嫌な気持ちや悲しい気持ちはなくなる」と言われているような気持ちになる。

この「やまなし」は、宮沢賢治の幻灯であり、カニが主人公の話です。カニたちは川の中に住んでおり、下の弟が中心となって展開し、何が起こるか不思議な気持ちで読むことができます。

この本の好きなところは、カニたちが何かを追っているところです。その追っているものはいい匂いだと表現されていて、私も嗅いでみたいと思いました。また、追いかけているものはどれくらいの大きさなのかも知りたいと思いました。

私が考えてほしいところは、カニが何を追いかけているのかと、題名の「やまなし」とは何かということです。また、宮沢賢治の考えていることは「とても分かりづらい」と思ってしまうかもしれないですが、その不思議さも魅力なのでぜひ読んでみてください。

カニの兄弟が暮らす川底の世界のお話が書かれている。「クラムボンが笑ったよ」、「クラムボンはかぷかぷ笑ったよ」などのちょっとしたカニたちの会話に笑ったり、ハラハラしたりする。最初は不思議だらけだけど、読んでいくうちにその不思議だった意味などが分かって何度も読みたくなってしまう。宮沢賢治さんのオノマトペが面白いし発想力もすごい。

このお話は、読み取るのに少し時間がかかるので、難しい本などが好きな人におすすめしたい。

「やまなし」というのは宮沢賢治が書いた幻灯だ。登場人物は、カニの兄弟やその親などで、この幻灯は、作者（宮沢賢治）にしかわからない世界観のお話だ。かわせみが来たことによって覚える恐怖や、やまなしが与える幸福で、カニの兄弟の成長を感じられる。

「やまなし」の魅力的な所は、カニの親子がやまなしを追いかける場面だ。この場面では、キレイな海の情景を想像してしまう。なぜなら、「水はサラサラ鳴り」や「青い炎を上げ」、「月光のにじがもかもか集まりました。」などの比喩表現が用いられているためである。

賢治が、「やまなし」という題名にした理由は「『やまなし』のように周りに幸せを与える生き方が大切である」ということを伝えたかったためであり、その宮沢賢治の生き方、考え方に感動する。だから、人それぞれの色々な考え方を学びたい人や、人のためにどう生きたらいいのかと思っている人におすすめだ。

「やまなし」は、岩手県で生まれた宮沢賢治さんが空想で作った物語です。５月と１２月の二部構成で、川底の様子をカニの兄弟の視点で書かれています。負けず嫌いで怖がりなカニの兄弟は心情が５月と１２月で変化していきます。自然がたくさんある谷底で色々なものを見ていくカニの兄弟たちが描かれています。

「やまなし」の魅力は１２月の部分です。５月は川にいるまだ知らない自然の生き物たちに出会っていきおびえている毎日でしたが、１２月には嬉しい出来事が待っています。それはまるでカニの兄弟たちに生きる幸せさを教えてもらっている気分になります。宮沢賢治さんの本は難しい本なので一度読んでも意味がわからないことが多いかもしれないけど、何回か読んでいくと意味がわかってくるし宮沢賢治さんがどう思ってこの「やまなし」という本を書いたのかがわかってきます。

ぜひ物語が好きな人や物語を深く読み取るのが好きな人は「やまなし」という本を読んでみてください。

小さな谷川の底にカニの兄弟がいる。小さな谷底を舞台にした、カニの兄弟を中心に描かれた作品だ。カニの兄弟の周りに起こる出来事にハラハラ、ドキドキする。
「やまなし」の魅力に欠かせないのはお話の中に出てくるやまなしだ。お話の最初の方では、カニの兄弟たちに悲しいことや色々なことが起こるが、最後のほうに出てくるやまなしを見てカニの兄弟たちは悲しい気持ちから楽しいという気持ちや嬉しい気持ちになっているという心情が読み取れるのだ。そんなカニの兄弟を見ていると、なんだかホッとした気持ちになる。
例えば少し悲しい気持ちになったら、「やまなし」を読んでほしい。
「やまなし」を読めば、「悲しいことがあっても、楽しいことを見つければ、悲しいことは忘れる。」と言われているような気持ちになるのだ。

本を開くと「やまなし」という題名があります。「やまなし」は難しくてよくわからない謎が多い物語です。カニの親子が中心となって話が進んでいきます。「やまなし」は宮沢賢治の空想の世界を描いたものです。途中で殺されてしまうクラムボンという謎の生物が出てきて更に謎が増します。

僕が特に好きな登場人物は弟のカニです。なぜ好きなのかというと負けず嫌いでなき虫な性格だからです。

読んでみたら難しかったけれど、心情などをよく考えてみるとすごくいい話だなと思いました。難しい本が好きな人もそうでもない人も、この「やまなし」をきっかけに宮沢賢治の世界にふれてみてください。

　この本はカニの子供の成長について書いてある本である。少し残酷な話だが最後の方はハッピーエンドで終わる宮沢賢治の理想の世界が少し書いてある。

　この本の好きなところはカニの子供が笑うところだ。なぜなら残酷なことが多い前半の中でも、ゆいいつカニの子供が笑ったからだ。

　この本を読んでほしい人はすぐにネガティブな発言、思考を担ってしまう人だ。
なぜなら最初はネガティブなカニの子供たちだったけど最後の方はポジティブになったので、ネガティブになってしまう人はカニの子供のようにその状況を乗り切ってポジティブになって欲しい。

作者の宮沢賢治が想像して書いた物語、「やまなし」。この物語は、物知りなお父さんガニと優しく接するお兄さんガニ、負けず嫌いな弟ガニで構成されているカニ家族が登場する。そのカニ家族は美しく、怖く描かれている川に住んでいて、厳しく恐怖の自然界で生きていく物語。この物語は深い川のように深く考えさせられる。「やまなし」の魅力に欠かせない登場人物は、カワセミややまなしだ。カワセミややまなしは厳しい恐怖の自然界を表現したり、その自然界を反転したような表現をし、カニたちに希望をもたせる生き物だ。この登場で情景や事態が大きく変化する重要なものであり、ハラハラ・ドキドキした気持ちになったり、ホッとする気持ちになったりして、しびれる感じがする。社会的に希望を持てない・・・、嫌なことがあってもう無理だ・・・と気持ち、気分がダウンしているそんなとき登場するカニたちが「自分たちも危ない自然界で生きているけれど、希望はあるよ！」と励ましてくれているような気がする。

　この「やまなし」の物語は、宮沢賢治の想像した世界に住む、仲のいいかにの親子の話だ。私の一番好きなシーンは、「クラムボンはかぷかぷ笑ったよ。」というかにの兄弟の会話のワンシーンだ。どうしてこのシーンが好きかというと、カニの兄弟が楽しく喋る姿が好きだからだ。「やまなし」の一番のみりょくは、物語が、５月と１２月に分かれていることだ。なぜなら、２つの違った川底の様子やカニの兄弟の成長がみられるからだ。この話を読み取るのは少し難しいが、読み取れたとき、また違った宮沢賢治の意図が見えてくるかもしれない。